

令和4年度 ピーチネットあかいわ研修会

R4年6月13日に、川崎医療福祉大学の小田桐早苗先生をお迎えし『コロナ禍の中、今を生き抜く!』と題して、研修会を開催しました。

「コロナ禍」という社会的状況。大きな不安、混乱に世界全体が飲み込まれた日々。その日々の状況を、私たちはどう感じ、どう過ごしてきたか？日本財団が発表しているアンケート（障害者・健常者両方からとった）結果から、共通する実感の違いを小田桐先生に教えていただきました。

【講演より】

○外出自粛する中で日常生活の不自由や苦勞について障害者は、必要な医療や福祉サービスの利用のしづらさや自分で対応する場面が増えたという項目が健常者より多くなっている。これは、社会に発信して欲しい内容で、問題意識をどこにもつか？色々な角度から考えることが大事。

○集わないことが当たり前になっていた2年間

自分の生活を見直す機会になった点もあるかもしれない。人との繋がりはどうのように変化したのか。少しずつ戻ろうとする部分もある中で、今、私たちはリハビリ中。

○できることを少しずつ出し合うことから

「知ろうとする姿勢」「声を出せる機会」を持ち続けること

○誰かがやってくれるのではなく、みんなで考える。

埋もれてしまいやすい声、存在がある。同じ課題に向き合っている状況の中でも、個別的な違いがあること。協議会として、出来ることを模索しながら、やりたいことを諦めることも、形を変えて実施することもあった。⇒「やらない」「しない」を当たり前にならない。

- ・ コロナ禍という社会共通の話題や解決課題があることで見えてきた障害当事者の生活実態や当事者の内面等、改めて考えるものを頂いた。
- ・ 共通する面と、全く異なる面とがあることを知り合い、共通認識を持ちながら話し合うことの重要性がよくわかりました。 ~アンケートより抜粋~